

全野生生物を含めた緑の連帯社会を

川崎立夫

近年、産業の発展と共に余暇の利用によるリゾート地の開発が活発化してきた。先史時代森の中で生活していた人類は物質文明が発達すればするほど緑の中に「心の休息」を求めるのであるか……。我が「ふるさと岐阜」はその点比較的恵まれている。例えば北アルプスのお花畑のようなところから市街地までを10段階に区分した自然度で示すと、本県は代償植生とはいえ、ブナやミズナラなどの生い茂る自然度8以上のところが24%以上もあり全国平均をはるかに超えている。樹木のある6以上のところともなれば8割も占めるが、衰えをみせぬ開発指向はこの緑豊かな自然をいつ^{むしば}むかしれない。

我が国のGNPは世界の14%を超えるまでになった。経済の発展は従来環境破壊と裏腹の関係にあり、それだけに我が国の活動は地球上の自然環境に様々なインパクトを与えてきた。その被害を最も大きく受けたのは熱帯雨林を持つ開発途上の国々であろう。国連のFAOやIUCN(世界自然保護連合)などの調査によると最近5年間に毎年本州のほぼ半分にも匹敵する1130万haの熱帯雨林が失われているという。この原因には当地の人口増による焼畑耕作等もあるが、木材輸入大国である我が国の責任は重大である。先月下旬ソウル大学で環境教育に関する会議があり筆者も出席したが、東南アジアの各国から多くの問題が投げかけられた。

本県土で森林の占める面積は82%、87万ha以上もあるが自然林はきわめて少なく、ほとんど2次植生で人工林率は44%を超えている。造林の大部分はヒノキ、スギのような針葉樹で根は浅く、保水能力もそう大きくはない。

筆者は哺乳動物などの調査のため森林に入る

機会があるが、広葉樹の林と比べて針葉樹のみの単純林の静寂さは無気味でさえある。巣だく虫の音も少なく鳥の囀りもない、正に死の森といった感じがした。皆伐や崩壊跡地に植林することは望ましいことであるが、根が深く、大きな葉が茂り、花が開き、多くの実をつける広葉樹による造林であれば動物たちのみでなく、治山治水の面からもよいと思うのであるが……。

今やカモシカの被害騒動は東・西濃から飛騨全域におよびつつある。彼等とて好んでヒノキを食べているわけではない。もともとナラ科やバラ科の植物の葉とかドングリなど木の実が好物だったのが、それらが無くなり、スギ、ヒノキに代ったため、生きるため止むなく失敬ということになったと思われる。勿論特別天然記念物という保護下にある彼等は狩猟圧を受けることなく増殖してきたが、反面共存を嫌うシカやクマは減少の道を辿っている。もっともカモシカは本県で1976年以来4000頭余も間引きしているが、環境変化で生息範囲が分散しつつあることは否定できない。

現在地球上に生存する野生生物の数は同定されているだけで約150万種、種不明のものを含めると500万種以上といわれるが、人間の活動に伴う生息地の破壊や環境汚染によって20世紀末までに50万種もの生物が絶滅するかもしれないといわれている。本県でもライチョウやヤマネをはじめ目につくものだけでも十数種が風前の灯である。なんとしてもすべての野生生物を含めた「豊かな緑の連帯社会」を築かなくてはならない。その啓蒙は自然史を教える博物館の大きな使命と考えるが……。

(岐阜県哺乳動物調査研究会会長)

実践報告

立体鏡の作製と展示への利用

國光正宏

昨年の夏、加茂高校鹿野勘次教諭、岐陽高校杉山政広教諭とともに、大野郡白川村大白川上流域で、地形・地質の調査中恐竜足跡化石を発見した。

この足跡化石は漣痕（さざ波の跡）の上に恐竜の連続歩行の足跡が残されているもので、恐竜の生きていた当時の古環境を考える上で極めて重要なものである。

現地へは道もなく、危険を伴う場所でもあるので、見学に行くことは困難である。岐阜県博物館では、足跡化石が残っている露頭（岩石が露出している場所）のうち、横7m、縦2.8mの部分のレプリカ（複製）を作製し展示している。

このレプリカは、ほぼ実物どおりであり、現地へは行けなくても、これを見ていただければ十分満足していただけるものと思う。

さて、ここで紹介するのは、現地の足跡化石や韓国の足跡化石を調査に出かけた折撮影した写真を立体視できるように考えたものである。

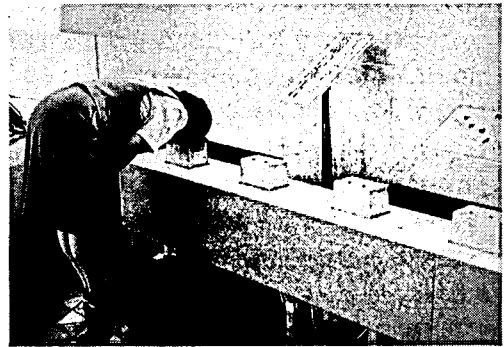
立体視は、地形などの様子を研究するときによく用いられることであるが、ここでは立体視が視線方向の凹凸を誇張する特徴を考え、足跡が残されている様子をよく理解していただくた

め、立体鏡をセットした装置を作製・展示した。

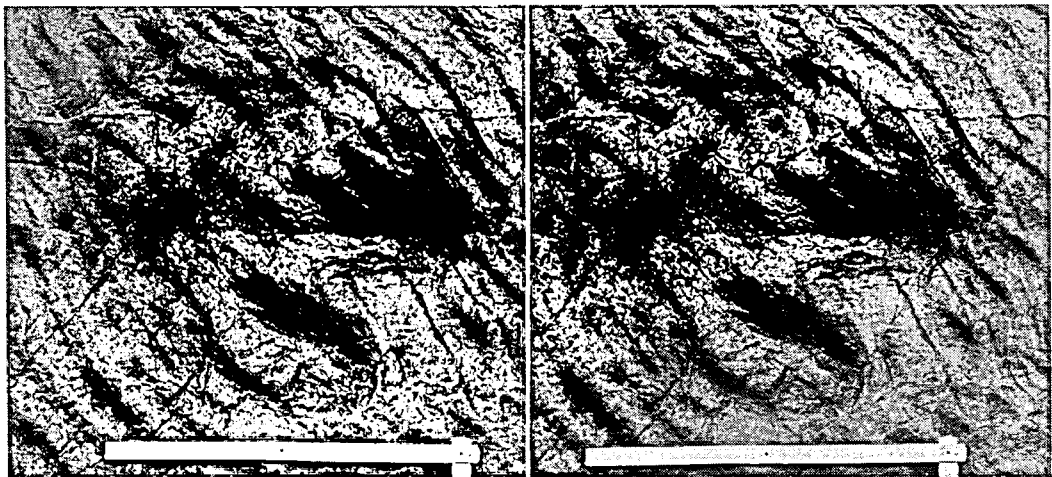
物が立体的に見えるのは、左眼で見た物の様子と右眼で見た物の様子が多少異なる2つの画面を頭の中で重ね合わせるからである。それゆえ、あらかじめ、2枚の見る方向のずれた写真を作製しておき、左眼・右眼でそれぞれ別の写真を見て、頭の中で重ね合わせると立体視できることになる。

下の足跡の写真は、左・右が少し異なる写真を撮影し、左・右の画面を6cm程ずらしたものである。この立体鏡の作り方等は紙面の関係で省略するが、第18回研修会で実施したい。

（岐阜県博物館自然係長）



立体鏡を用いた展示例



白川村で発見した「イグアノドン型」恐竜足跡化石の立体視用写真

秋に鳴く虫

長尾 智

夏も終りに近づくにつれて、ヒグラシやツクツクホウシの声に混じって、草間からはコオロギの声がきわだってくる。さまざまな鳴き声を聴いていると、その主を確かめたいくなる。数年前にもそのように思い、エンマコオロギとミツカドコオロギを飼育したことがあるが、まったく鳴き声が違うことを知った。エンマは、強弱をつけて、「フィリフィリリー」と鳴いたが、ミツカドは、「チャ・チャ・チャ」と4声くらいずつ切って力強く単調に鳴いたのを記憶している。今年をもっと多くの種類を聴き分けられるようにしようと思って、野外観察、飼育観察を続けた。

1. いろいろな場所で鳴くコオロギの仲間

コオロギ類には小型のマダラスズ属と呼ばれるグループがあるが、図鑑に載っている6種のうちの2種ヒゲシロスズとマダラスズを飼育した。ヒゲシロスズは、百年公園内外の苧り取った枯れ草の中にいたが、マダラスズは、根尾村能郷の林縁の裸地で採集した。鳴き声は、ヒゲシロが「チリチリチリ」と連続して張りのある声であるのに対して、マダラは「ジーッ・ジーッ」と0.5秒間くらいの間隔をあけて低い声であった。

コオロギ類には樹上性のものもいる。街路樹などで、大きな声で鳴いているアオマツムシもその一種である。またカネタタキという小型種もいて、林の中や生け垣で「チン・チン・チン」と規則正しい間隔で鳴いている。博物館の裏山でたたき網という方法を使って採集することができた。雄は、腹部中央までも満たない左右の前翅を垂直に立ててこすり合わせて鳴いていた。コオロギ類の雌は鳴かないのであるが、カネタタキの雌では、翅^{はね}さえもまったく退化している。

根尾村水鳥のクズの葉上でカンタンの雄雌各1匹を採集した。コオロギ類では最も優雅に鳴くとは聞いていたが、実際に聴いてみると、なるほどとうなづける。暗くなると「リュウリュウ

ウリュウ」と柔らかな声で単調に鳴き続けている。警戒心が強いので、そとのぞかないと鳴き止んでしまう。

2. 高い音を出すキリギリスの仲間

鳴く虫には、コオロギ類の他にキリギリス類がいる。昼間、草原から「ギョー・チョン」と大きな声が聞こえてくるが、あれが、キリギリスの声である。高い草原では、なかなか姿が見られないが、時々、雄は、茎につかまって鳴いていたので網ですくって採集した。

休耕田のような湿った草原には、クサキリが多く見られる。これは、低い声で「ジー」とかなり長く鳴いている。

今年の9月27日から29日にかけて白川村の大倉山を調査したが、イブキヒメギスが多いので驚いた。標高1800m～2150mの間の所々の草間に数匹ずつ集団となって日光浴をしているようであった。平地にはヒメギスという近縁種がいるが鳴き声は似ていて、「シリリ」と弱く鳴いていた。

標高1750mのチシマザサの葉上では、大きな声で「チキチキ」と鳴いているヤブキリを捕えることができた。

3. 鳴くしくみ

コオロギ類とキリギリス類は左右の前翅をこすり合わせて鳴くが、前者は右翅を、後者は左翅を上にして鳴いている。上の翅のヤスリ状部分と下の翅のまさつ器部分をこすり合わせて音を出すのだが、前者では左右の翅に両方の部分がついているのにきまって右翅のヤスリと左翅のまさつ器を使って音を出しているのが不思議である。それに対して後者では左右の翅が分化している。

今まで鳴き声をカタカナで表記してきたが、読者にはなかなか理解してもらえないと思う。今後は、できるだけ多くの種類の鳴き声を録音して、来館者に聴いてもらおうと計画している。

(岐阜県博物館学芸員)

第45回公開講座報告

旧徳山村の民具について

とき 平成2年8月2日

ところ 藤橋村中央公民館

講師 一宮市文化財審議会委員

日本民具の会 評議員 脇田雅彦氏

本年度第2回公開講座を、藤橋村及び同村教育委員会の全面的な協力のもとで開催した。

今回の講演及び現地見学を民俗分野に視点を当て計画したところ、公共交通機関の不便な所にもかかわらず42名の参加者があって、関心の高さを裏付けたかたちとなった。

講演の終了後、脇田先生ご夫妻の案内で、村役場にほど近い所にある旧徳山村の民具を収納した収蔵庫を見学した。その後、同村鶴見にある歴史民俗資料館、最近建設されて脚光を浴びている藤橋城（西美濃プラネタリウム）を見学し、15時に現地解散した。

☆ 脇田先生の講演要旨

(1) 民俗学へのあゆみ

私の民俗学への第一歩は、地域によって背中蓑の形が異なっていることに気付き、興味を持って県内を調査したことから始まる。こうしたフィールドワークを続けているうちに、老人の話から農作業のこと、雑草の名前、着るもの、食べ物、住い等人間の生活全般について興味を持って研究するようになった。現在は衣類の研究を中心に行っているが、こうした総合的な調査研究から、日本人の本当の自然観が明らかにできるのではないかと考えている。



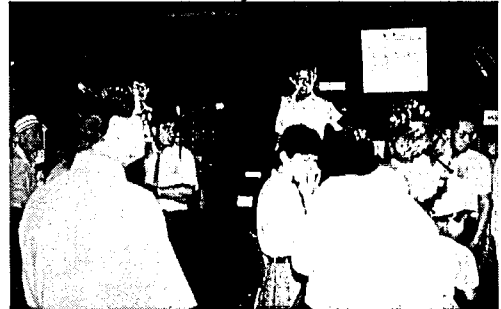
講演中の脇田雅彦先生

(2) 旧徳山村の民具について

徳山村は福井県境に位置するところから、冬は日本海側の気候で積雪の多い厳しい所である。徳山には8集落あり、これらの集落では焼畑を行い、雑穀類を食する生活であった。しかし、大正時代までの日本では、平野部であろうと雑穀生活であり、特にヒエは栄養価の高い作物で、長期保存も可能なすばらしい作物であった。

徳山の生産用具は、国指定の重要有形民俗文化財になっており、明方村のものに負けない全国でも十指に入るものである。全般的に特色のあるものが多く、例えばウケの付いているまな板、木をくりぬいたセイロ、油絞りの道具、ウシメという人力馬^{まぐわ}鋸等があげられる。小穴が幾つかあいた杓子から、食べ物のダンゴもここでは茹^ゆでていたことがわかり、蒸すようになったのは江戸時代末期ではないか。また、徳山のセイロや膳の形がO型であり、後に口型になったと考えられることから、徳山には貴重な資料が数多く残されている。冬季の寒さを防ぐ工夫として、ネヤ（寝屋）に箱形のベッドをしつらえて藁^{わら}を敷き、その上に布団を敷いて寝る方法は、山形県など北陸方面に見られるが、今回の調査で徳山でも行われていたことが明らかとなり、このことも貴重な発見の一つである。

民具は道具だけがすべてではなく、必ず木等の植物と共存していること。かつての日本にはトチ、ナラ等の落葉広葉樹林が広く分布し、人々はその自然の中で生かされてきた。民具等の調査から、その奥に人間が自然とどうかかわっていたかを明らかにしていくことが大切である。



藤橋村の歴史民俗資料館にて

松井屋酒造資料館

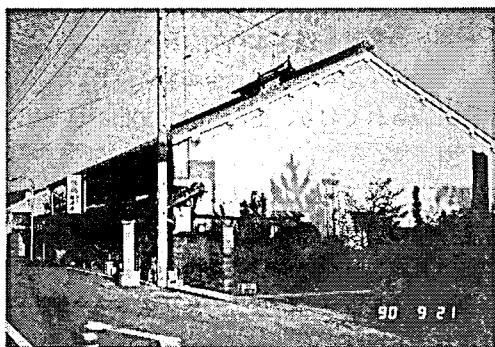
〒501-33 加茂郡富加町加治田 688-2

TEL 0574-54-3111

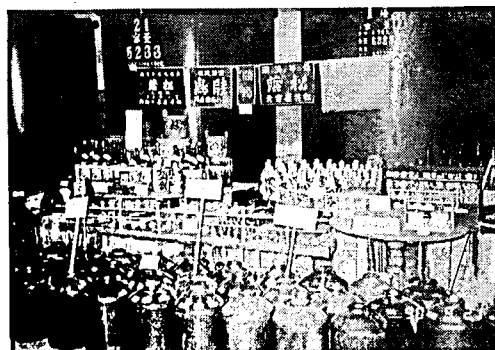
美濃加茂市に向かう国道248号線の津保川を越えたあたりで左に折れ北に走ると、やがて山の麓に開けた町並に入る。ここが富加町加治田である。かつては、飛騨街道の下街道として、伊深、神洲から飛騨に抜ける街道沿いに栄えたところである。その町並のほぼ中央あたりに酒造資料館がある。そこは、江戸時代の中頃より代々造り酒屋で、当地方の素封家として政財界に重きをなした酒向家の住宅である。

現在の当主であり館長の嘉彦氏は、「日本酒は、祝い酒、花見酒、月見酒、清め酒などと古来から人々の暮しと深いつながりの中で育てられ、飲まれてきた。しかし、時代の波は酒造りにも押し寄せ、機械化が進み、昔ながらの酒造りの手法が忘れ去られようとしている。何とか古くからの酒造りの様子を保存し、その歴史を伝えようと資料館の設立を思い立った。」と語られた。そして、2年間の準備期間を経て、今年(1990)4月に開館した。

資料館の建物は、現在も店舗、住宅として使われている。寛政7年(1795)に建てられた主屋は、町家の代表的家屋の形態を今も残している。表側の太い鬼格子に昔のままの蔀戸しじゆがつき、帳場のカウンターは、ニワと同じ高さに板を張



松井屋酒造資料館の全景



25石タンクの前に展示された様々な酒器り、お客様を見下げないで商品を売るように工夫されている。大梁はりは8間(15.5m)にも及ぶ太い長尺の直材が使われ、先人の家に対する思いと繁栄はるぶりをうかがわせる。主屋に続く酒蔵は、更に古く二階建てで今は展示室になっている。ここでは、最近まで冬場になれば新酒のにおいが立ち込める中、社とうじ氏のもとで10人以上の人たちが忙しく立ち働いていた。

展示室の1階には、日本酒のできるまでの工程に従ってキツネオケ、カスリ、サルなどの酒造用器具、小道具類が、25石(約5400ℓ)用のタンクが立ち並ぶ中に展示されている。新酒ができあがるまでには、玄米を精米することから始まって、170種類の器具、道具を使い1000もの工程を要すると言われている。その工程が大きく15に分けられ写真、解説パネルでわかりやすく紹介されている。また、釜場かまばや糟場もなば、麴室こうじむろ、舂場もとばなどが、実際に使用された場所に展示されていることも当館の大きな特徴といえる。

2階には、当家に伝わる生活用品、民具が陳列してある。あんどんや電灯、こたつなどの照明、暖房器具には、時代とともに形態、材質、燃料の移り変わりがよく現れており、その変遷が一目瞭然である。

資料の総数は、1552種類4700点である。将来はこの展示場で実際に仕込しこみを行って、お酒のにおう中で見学してもらえるようにしたいと、最後に館長さんが言われた言葉が印象に残った。

○開館時間 10時～16時

○休館日 毎週月曜日 ○入館料 無料

(岐阜県博物館 中島 恬)

◎ 受賞おめでとうございます

日本博物館協会顕彰

青木 允夫 氏

岐博協副会長・前内藤記念くすり博物館長

9月14日付けで協会より受賞通知が届きました。おめでとうございます。

◎ 第15回東海三県博物館協会
交流研修会終わる

平成2年度の研修会が、10月4日(木)・5日(金)の両日にわたって、愛知県知多郡美浜町で行われました。今回のテーマ「観光地の中での博物館 — 観光施設化の功罪」について研修が深められ、参加者にとって有意義な時を過ごすことができました。

第1日の研究会では、日本福祉大学教授 福岡猛志氏の基調講演の後、各県代表者による実践報告と意見交換がなされました。この中で、本県代表の飛騨民俗村学芸員 小山司氏による実践に裏打ちされた確かな発表がなされ多くの人たちに感銘を与えました。

第2日は、INAX・焼きもの散歩道と酒の文化館の見学を行い無事終了いたしました。

両日の研修報告につきましては、次号で詳しく内容を掲載したいと考えています。

なお、来年度は、岐阜県が当番に当たっています。皆様の御協力をよろしくお願いします。

◎ 第18回研修会案内

第17回会員研修会は、台風のため中止になりました。奥美濃地区の会員の方々には準備からその後の連絡等いろいろとご苦労をおかけいたし申し訳なく思っております。

この会をそのまま別の日にとともに思い、各方面に相談をさせていただきましたが日程も取れず、加えて12月11日 第18回研修会が持たれるため、見送ることにしました。どうかご了承ください。

秋の鳥 モズ



県内で一年中見られる留鳥です。秋の訪れを告げるモズの甲高い声は、モズの高鳴きといわれ冬の縄張りを宣言するものです。

なお、第18回研修会は、下記の内容ですので多数ご参加くださいますようお願いしております。

- ・期 日 12月11日(火)
- ・テーマ 「手づくり展示・解説パネルについて」
- ・会 場 岐阜県博物館

◎ 第46回公開講座案内

- ・期 日 10月28日(日)
- ・会 場 岐阜県博物館
- ・日 程 13:00～13:30 受付
13:30～15:30 あいさつ・講演
テーマ 「日本の仏像の魅力」
講 師 成城短期大学長
清水 眞澄 先生
15:40～16:10 見 学
特別展「濃飛の仏像」を中心に
して
ぜひご参加ください。

編集後記

中秋の名月も過ぎ本格的な秋を迎えました。どの館・園も特別展、企画展と催し物が多数計画されており、正に芸術、文化の秋を思わせませす。

第91号ができあがりました。お届けします。今回は自然に関わる実践を多く載せました。錦織り成す自然の美しいこの時期に、回りの自然をじっくりと観察、観賞するきっかけになればと思います。